

## 口頭発表「小動物との触れ合いを通して、思いやりの心を育む」

石坂益夫 新井己舟



## 1 はじめに

偶然、この地上にあるものは人間として生まれ、又あるものは動物として生命を授かるのですが、そのような立場の異なるもの同士が触れ合うことのできる機会を意図的に与えるのが、学校における小動物の飼育だと思います。本校では、うさぎの飼育を行うことにより、児童が人間として成長する上で不可欠な、生命の大切さ・思いやりの心・生き物の世話をする責任感等を育んでいます。そして、今回の発表のテーマである学校飼育動物担当獣医師との連携は、ある一匹のうさぎをきっかけにして始まりました。これらのことについて以下に述べたいと思います。

## 2 飼育担当教諭が常日頃心がけていること

## (1) 飼育方法に関する正確な情報を知ること

動物を飼うというのは、命を預かることです。その場合、責任を持って飼育しようという気持ちは何よりも大切で指導の軸となります。いざ正しく飼うということになると、なかなか難しいものです。その一つの理由として思い込みなどによる勘違いが挙げられます。

——例えば、餌については、以前は給食センターからの野菜に加えてパンも時々与えていました。しかし、獣医師からパンは腸に大きな負担をかけるので不向きであり、牧草の方が望ましいとのアドバイスを受け、変更しました。良かれと思ってしていることでも、正しくない場合も素人である担当者にはよくあることです。

次に、飼育部屋について述べたいと思います。従来、本校では雌雄別の飼育小屋で多頭飼育を行っていましたが、ケンカが絶えませんでした。特

に雄うさぎ同士が噛み合うようなケンカです。調べたところ、うさぎは習性として縄張り意識が強く攻撃的であることが分かりましたので、現在では、一匹ずつ個別に飼育し、飼育部屋の扉にうさぎの名前を表示しています。その結果、ケンカでうさぎが怪我をすることがなくなると共に、個々のうさぎの健康管理と観察が容易になりました。

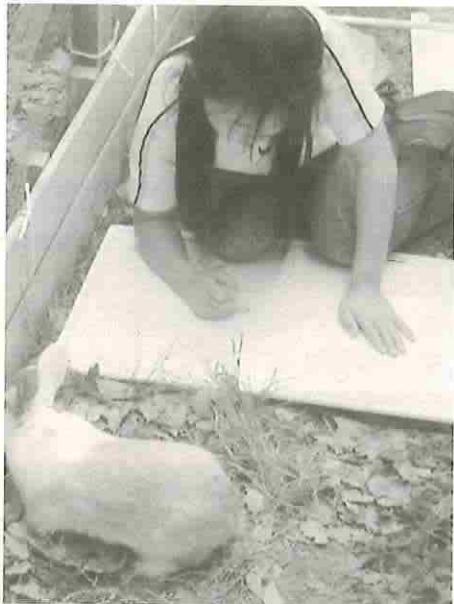
## (2) 飼育を通して情操豊かな児童を育くむ

学校で飼育している小動物について、児童が常に関心を持つようするため、朝礼で、子うさぎの誕生や成長の様子、名前の紹介等うさぎの状態に関する情報をできるだけ伝えるようにしています。又、教科の授業でも、小動物との触れ合いを生かすよう努めています。5月には図画・工作の時間に、4年生が写生の対象としてうさぎをスケッチしました。冬には、低学年の授業で、版画のモデルとしてうさぎを用いる予定になっています。

この6月に一匹のうさぎが体調を崩しました。動物病院で点滴や投薬を受けました。その後だんだん回復し、受診後3日目には体重が130グラム増え、1.68キログラムになりました。飼育委員の児童に、病気のうさぎについて話したところ、早く良くなってほしいとの願い



を込めて、千羽鶴を折り、持つて来てくれましたので、飼育小屋に説明の言葉と共に飾っています。因に実際の折り鶴の数は、1000羽ではなく、99羽です。これは、うさぎの「クー太」という名前をクー太、クー太と2回並べた語呂合わせによるものです。



### 3 飼育のための給食センターとの連携について

#### (1) うさぎの餌について

現在与えているのは、固形飼料（ペレット）、牧草、給食センターから供給される野菜、又は校庭のクローバー・クズなどの野草です。

給水方法については、うさぎは毎日体重1kg当たり50~100mlの水を飲むので、新鮮な水の補給が欠かせません。一般的には給水器を用いるようですが、このような器を取り外したり、吸い口を掃除して清潔に保ったりするのは児童には難しいので、本校では、掃除が簡単でひっくり返ることのない陶器の皿を使用しています。

#### (2) 給食センターとの連携について

学校飼育動物を管理する上で、餌の確保については色々悩むところですが、本校では給食センターと連携し、余った野菜や白菜・キャベツの芯、ニンジンの皮などを届けてもらっています。又、これに対し、学校からは、学年末に飼育委員会の児童がお礼の手紙を書き、給食センターの職員にとどけています。通常はこの給食センターからの餌が豊富にありますが、夏休み等の長期休暇中は、センターからの供給が途絶えますので、牧草の量を増やすと同時に代用として野草のクローバーやクズを与えています。

さて、本校での小動物の飼育において、ユニークな点の一つは、「全児童がうさぎと触れ合うことのできるスペースを創設したことです。では、次にその経緯について述べたいと思います。

### 4 開放スペースにおける、うさぎとの触れ合いの場の設定

#### (1) 開放スペースを設置した理由

私たち人間は動物に触れることで心が安らぎ、

思いやりの心が育つものです。そのような環境を児童に与える目的もあって学校では小動物を飼育しているわけです。しかし、飼育小屋で飼っているだけでは、専ら飼育委員会の児童がうさぎの世話をするだけになり、全児童がうさぎと触れ合う機会とはなりにくいものです。もとから動物に興味を持っていたと考えられる飼育委員会に属する児童しか、小動物に関わりを持てない状況になります。そうではなく、今まで特に小動物との関わり合いがなかったような児童にも、動物を身近に見て触れる機会を提供したいと考えて、設置したのが開放スペースです。

#### (2) 開放時間（火・木曜日の昼休み時間）

うさぎは一日に14~57グラムの糞をします。飼育小屋を清潔に保つためにも、日々の清掃は欠かせません。さて、その清掃ですが、本校では、飼育委員を担当している高学年児童が、毎日昼休みの清掃時間に、5年生と6年生がペアとなって飼育小屋の掃除をしています。その際、小屋の外側に作った囲いの中にうさぎを入れ、逃げないようにしています。囲いの広さは約2.5メートル×4.5メートルで、この敷地の中には前年に種をまいてクローバーを育て、うさぎが自由にこのクローバーを食べられるようにしています。触れ合いを楽しみにやってきた児童もこのクローバーを摘み取りうさぎに与えています。このようにして、全校児童がうさぎと触れ合うことができるようになっています。開放日は火曜日と木曜日で、これらの日は、全学年とともに、午後から授業があるため、誰でも、来ることができます。

#### (3) 開放スペースでの児童の感想・様子

開放スペースでの児童の感想の中から、一人の視覚障害の男子児童の様子について述べます。彼は触れることにより様々な物を観察するわけです。彼が来ると、まずネットで囲った柵に触れます。柵を補強したりすれば、すぐ気が付き、「あれっ、柵が丈夫になっている」などと感想を話します。次にうさぎに近づき、触れながら、「これが耳、長いなー。これが背中。柔らかいなー」などといいながらうさぎに触っています。うさぎは普段、開放スペースの四隅にいて穴掘りなどをしていますが、児童が近づいて来ると、触られないよう移动して場所を変えることがあります。しかし、この児童が来たときは、そのように動き回ることはなく、じっとして、触れられるままになっています。彼の優しさがうさぎにも感じられるからでしょうか。彼にとって、生き物に触れるこの出来る絶好の機会となっています。

他の児童の感想も紙幅の許す限り紹介しておきます。1年女子は「はやくせわをしたい」とおもいました。2年女子は、「あつたかいし、しんぞうがうごくのがはやい」ということに気付きました。又、5年男子は「すごくあたたかい気持ちになりました。5年女子は、「うさぎは、今、どんな気持ちなんだろう」と相手を思いやることができますようになりました。

### 5 幼稚園児とうさぎの触れ合い

本校に隣接する幼稚園では、小動物の飼育をしていません。そこで、幼稚園児とうさぎとの触れ合いの場を設定したところ、園児達もうさぎとの触れ合いを楽しみにするようになりました。園児は、自分たちが栽培し収穫した後のさつまいもの葉や茎を餌として持参し、開放スペースでのうさぎとの触れ合いを心待ちにするようになりました。



### 6 児童による自主的な「うさぎ飼育日誌」の作成

この春卒業した一人の女子児童は、「うさぎ飼育日誌」を自主的に書いていました。彼女は小動物の世話をしたくて飼育委員となり5年生と6年生の2年間担当しました。彼女は、5年生の時より自ら進んで、うさぎについて日誌を書き、廊下の窓に張り出すようになり、日誌を卒業まで書き続けました。その一部を紹介します。

「飼育小屋にいくと6年生がカギをあけてくれました。一歩ふみこむとぐにやっと何かをふみました。そろと足をみるとフンが、でも、そのうちふむのもなれました。さっそく、あいぼうが生きているかチェック。あちこちさがして、岩の上にんじんをぱりぱり食べているのを発見！4年の時に白くにごっていた目はもっとにごっていましたが、すっかり大きくなり元気でいてくれてとてもうれしかったです。」

本児は、5年生の頃、うさぎの飼育について次

のように考えていました。「小屋の掃除をして餌をやればいい」と、ところが、世話をしていたうさぎの死を通して、考えが変わり、責任感を自覚するようになりました。本児は次のように書いています。「いろいろな経験をするうちにだんだん、自分たちがうさぎの命を預っているのだという責任の重さを感じ、活動の一つ一つに真剣に取り組むようになりました。」

この生徒は、卒業後に飼育日誌の写しと感想を届けてくれましたので、その文章を以下に引用します。「私が2年間の飼育委員の活動で学んだことは、命の大切さ、協力することの大切さ、生き物を世話することの楽しさです。このことは後輩にも受け継いでほしいと思っています。」この文章からは、小動物の飼育を通して、私たちが児童に育みたいと願っていた目標や意義を見事に学び取ってくれていることがよく分かると思います。

### 7 全校児童対象のうさぎに関するアンケート調査について

このアンケートは、平成19年5月11日に実施しました。このアンケートの内容と結果について表（別表）にまとめました。このアンケートは、うさぎが好きか、嫌いかということや、うさぎの世話や飼育に興味があるかどうかが、うさぎに触れる頻度に関係するか否かを確認するために行いました。実施前は、うさぎに「触れたことがあれば」→「好きになり」→「世話や飼育に興味を持つ」という流れが生じるのではないかと期待していましたが、実際にはそのようなハッキリした傾向は見られませんでした。しかし、表から分かることですが、うさぎに触れたことがある児童が、うさぎが好きであり、世話をしたいと思う割合は男子、女子共に大きな違いはありません。一方、うさぎに触れたことがないのに、うさぎが好きであり、世話をしたいと考える割合は、男子に比べると、女子の割合の方が非常に高いという特徴がありました。今回のアンケートは1回だけのものですが、次年度以降も続けて行えば、時間の経過や経験の深さによる変化などが読み取れ



なのではないかと思います。

## 8 学校飼育担当教諭と学校飼育動物担当獣医師との諸連携について

うさぎの歯は1年間に10~12センチも伸びると言われています。伸び続けるのを防ぐために、かじり棒をそれぞれのうさぎに与えています。

ところが去年の6月に生まれた一匹の子うさぎは、3ヶ月たっても棒をかじらず、歯が異常に長く伸びる不正咬合であることに気づきました。因にうさぎの名前は「クー太」といいます。獣医師に見せたいと治療先をさがしていたところ、大阪府教育委員会「学校飼育動物担当獣医師との連携」に基づく地区担当獣医の紹介があり、近隣にある「大野台どうぶつ病院」院長の平井収（おさむ）先生との出会いが生まれ、うさぎの歯の治療を受けることになりました。

学校飼育動物担当医ということなので、受診の際に、うさぎ飼育の状況（飼育小屋のイラストや餌について）

を詳しくまとめた資料を用意し、飼育方法が適切であるかどうかを相談したところ、丁寧な説明と共に、飼育環境は良好な状況である旨のご確認を得ました。



同時に、平井先生の方からは、学校飼育動物担当獣医師専用のフォームと思われる、学校向けの「動物飼育の状況に関するアンケート」の記入を求められました。その中の一項目として、「実施して欲しい要望」に関する設問があり、以下の3項目を希望する旨回答しました。

- ・飼育に関する講習会の実施
- ・学校現場での飼い方についてのアドバイス
- ・動物疾病時の治療

平井先生より、講習会の開催を了承なさる旨ご返答があり、事前に質問事項の確認や調整を行った上、11月8日の飼育委員会活動日に平井先生他、獣医師1名・動物看護士1名を学校に迎えて講習会を開催しました。

当日は、飼育担当教諭3名、飼育委員会児童23

名が「うさぎの日常管理」「健康チェック」について講習を受け、健康チェックについては平井先生が用意された健康チェックメモに基づき実際にうさぎを観察しました。

6匹いる親子うさぎの体重を測定したところ、オスのうさぎが、メスのうさぎや子うさぎより軽かったのを見て、児童からは「お父さんうさぎが一番軽いんや！」と驚きの声が上がりました。

平井先生からは次のような感想をいただきました。

「子供たちが授業中に熱心にメモをとる姿に感激しました。今後は、もう少し多くの児童を対象に授業ができるといいですね。」

さて、うさぎの「クー太」は現在も約2ヶ月に一度の頻度で平井先生から治療を受けています。平井先生とのこれから連携につきましては、今後の予定として10月に2年生児童を対象に飼育方法などについて、ご講演いただくことになっています。

このような本校での小動物飼育の取り組みに対し、2つの新聞社から取材を受け、記事となりました。一つは、『毎日ペット新聞』Vol.17 07冬号で、平成19年1月付けです。内容は、「学校飼育動物」をテーマにした特集の「大阪府教育委員会と大阪府獣医師会との連携活動」です。例として本校での取り組みが紹介されました。

二つ目は、『日本教育新聞』で、平成19年6月25日



付けの紙面に掲載されました。

テーマは、「生命を尊重する態度の育成」です。

以上が、大阪狭山市立南第二小学校における、小動物の飼育を通じて、思いやりの心を育む取り組みの概要です。

(大阪狭山市立南第二小学校教諭)

## 【質疑応答】

<大阪・山本>

会場のどなたかに、知っている方がいらっしゃったら教えていただきたいと思います。講演の中で学校飼育動物担当獣医師というお話がありましたが、公立の場合はそのような先生のご指導を受けられると聞いています。私たちは私立なので、そのようなシステムがあるのかということを知りたいと思っています。現在は、動物が病気や怪我をすると個人的に獣医師のところに連れて行っています。そして、そのようなシステムがないために、わからないまま飼育している現状があります。

また、発表の中にウサギを抱いている子どもの写真がありましたが、幼稚園の場合、園児にウサギを抱かせると、ウサギが暴れて子どもを傷つけたり、ウサギが骨折したりする事故が心配です。それなので、園児にはウサギは抱っこしないで、なでたり餌をやったりすることだけを、園児にきちんと説明してやらせてています。

このような状況ですので、獣医師さんに、正しい飼育の仕方や扱い方を教えていただければと思います。

<中川>

全国的な話をしますと、公立の学校の飼育状況がたいへんだったということで、行政に働きかけて、そのような制度をつくりました。私立の幼稚園は、先ほどの北口先生のところのように、しっかりと認識されて、目的通りに飼われているところが多く、また、獣医師もボランティアで活動しているところもありますので、獣医師に余力がないという現状があります。しかし、獣医師会の紹介を得て、個人的に地域獣医師会員と契約を結んで支援してもらっている私立の学校もあります。

また、ウサギとの触れあい方については、ウサギにも子どもにも心地よいふれあい方ということで、年に一度は獣医師からアドバイスをするようにしています。したがって、私立の幼稚園の先生も、個人的に獣医師会に相談していくだいでみたらどうかと思います。

<石坂>

ウサギの飼い方の本を読んでみると、どの本でもウサギは抱かれるのが嫌いだと書いてあります。ただ、抱き方によっておとなしくしている場合と、暴れる場合があるので、やはり、怪我などが心配ということもあって、最近では抱かせることはしなくなりました。

<神奈川・西>

私たちの小学校では、飼育委員会という特別活動の中で飼育をしていますが、発表された先生の学校では、何人の子どもたちで飼育をしているのかということと、全校を通しての飼育ということですので、総合的な学習の時間の中で、あるいは、教科の中での活用ということがあったかどうか、お聞きしたいです。また、関西の方では、学年飼育という流れが起きているかということについてもお聞きしたいです。

ここからは意見ですが、このアンケートにあるように、「ウサギの飼育に興味がありますか?」と問うていますが、それを全校児童に与える機会がなかなかとれないと思います。飼育を通して情操豊かな人間を育てることをねらっていると思いますが、もっと言えば、科学的な発見があるとか、体験的なものが得られるとかということをねらうとすれば、直接的な飼育をしていないと、なかなかねらいを達成できないと思います。したがって、全校の子どもたちに飼育体験ができるような、学年飼育を考えていきたいと思っています。

<石坂>

本校では、委員会活動として、5年生と6年生の希望者で活動しています。現在のところ、合わせて20名です。月曜日から金曜日まで5、6年生がペアを組んで各曜日1組ずつが担当しています。

学年飼育は府下では少ないと思います。本校ではまだ実施しておりません。

また、ウサギの教科の中での活用ですが、4年生で図工の中で実施しているくらいで、まだそんなにたくさん活用しているわけではありません。



うさぎに関するアンケート調査結果（平成19年5月11日実施）

(別表)

